

地球温暖化の防止策

千分の四戦略で炭素を貯留

農地への有機物投入や緑肥の栽培は、現代において地球温暖化の防止策としての目的も兼ねるようになってきた。

連載前期分の3回目（4月21日）で紹介した千分の四戦略（4/1000イニシアチブ）はその例である。世界の農耕地の炭素含有率を毎年4/1000ずつ増やして炭素を土壌中に貯留し、大気中の二酸化炭素濃度を減らそうという取り組みである。

果樹園で剪定枝投入

日本での取り組みがどの程度進められているのか調べてみたところ、県レベルで取り組みが行われているのは、日本種苗新聞が所在する山梨県だけであった。

山梨県には果樹園が多いことから、剪定枝の炭化や草生栽培、有機質肥料の投入を進めているとのことである。これを二

酸化炭素発生の削減にちなび、県産の果物は環境に優しいという評価を消費者から得られることを目指している。

国としての取り組みも環境保全型農業直接支払交付金を設け、堆肥施用やカバークロップの実践農家を支援しているが、実施面積は4万ha前後と伸び悩んでいるという。

対策論説には勘違い

農水省の4/1000

イニシアチブへの取り組みにも積極性が感じられない。ある農水省職員による論説を読んだところ4/1000イニシアチブをすばらしい取り組みであると褒めておきながら、日本では相対的に農地土壌の炭素含有量が多いため、10年で4%増加させると倍以上の含有量となり、2030年に向けた農地吸収源対策を超えてしまうし、有機物を増やしてもコストに見合